

巻頭言

## 働くことと未来に希望が持てる社会づくりへ —ワーカーズコープ設立を目指す方々との出逢いから—

高成田 健 (日本労協連 事務局長)

12月に入り、2019年が終わろうとしている。元号も変わり変化の年であった。

協同労働の協同組合法の法制化も11月末に法案が作成され、着実に進んでいるが臨時国会には間に合わなかった。

アフガニスタンで凶弾に倒れたペシャワールの会の中村哲さんは、「100の診療所より1本の用水路を」と、白衣を脱いで作業着を着て、15年以上掛けて約27kmの用水路を住民と共に作り、1.65万haの砂漠を緑の大地に変え、65万人の難民が帰農し定住することができるようになった。この灌漑設備は、日本の江戸時代からの技術を用いて手作業で作ることで、現地の人々に仕事を作り、また自分たちで直すこともできるという。中村氏は倒れたが、彼の灯した炎は消えない。

私たちの協同労働の運動も、焦らず、自らの手で法制化を実現することを全国の現場・組合員で考え、改めて協同労働を自ら深め、自分の言葉で自分たちの実践を発信し、共感を広げながら法制化を達成したい。

日本労働者協同組合(ワーカーズコープ)連合会(以下、労協連)には、

法制化を待たずして、今年4月よりワーカーズコープ、協同労働についての問い合わせが毎月来ている。「ワーカーズコープを作りたい」「いまの組織をワーカーズコープに転換したい」「協同労働の運営を教えて欲しい」「事業をどのように立ち上げるか」「まちづくりにどのように地域住民と取り組んだらよいのか」など、メールでの問い合わせから始まる。何度かの質疑を後に、多くの団体は訪問を希望し、地域労協やセンター事業団の各事業本部と共に訪問し協同労働の説明を行う。その後、具体的なワーカーズコープ設立や転換への対応、設立準備会に参加するなど、継続して支援している。

今年度の取り組みで、具体的な協同労働の団体の設立にまで至ったのは1件で、簡単に設立という訳にはいかない。共感する仲間づくり、協同労働の一人一票の合議による運営、資本金を自分たちで集める、取り組みたい事業の経営を軌道に乗せるなどハードルがある。一朝一夕で立ち上がるものではなく、想いを共にする仲間を募り、仲間と事業の計画を作成し、資金やモノ

を共に集め、設立に至る。

長野県信濃町の不登校など困難を抱えた子どもを持つお母さんたちによる仕事おこしは、昨年の11月に相談があったから、立ち上げ準備会を発足し、仲間が毎月一人ずつ増えていくなかで計画を作成し、1年掛けてライフワーク・レインボーのNPO法人の設立申請(労働者協同組合法が成立していない中、代替策としてのNPO法人)にまでたどり着いた。子どもたちが、尊重された存在として一人一票で団体運営に関わりながら働くことができる、協同労働へのブレない想いを基礎に、多様な能力や想いを持つ人たちが集まり、一緒に実現しようと内包しながら、話し合い合意をつくりながら団体の計画に反映させて設立に向かった。

他にも「有機農業を基に持続可能なまちづくりに挑戦したい」「障がい者が自立して安心して働ける団体を作りたい」「非正規労働の女性たちが自立して地域貢献の仕事を作りたい」「地元で材料を用いた食品加工をしたい」「団地の高齢化に伴い高齢者の拠り所や仕

事おこしをしたい」「協同組合の仕事で組合員自らが担いたい」など、あらゆる世代、あらゆる分野、あらゆる地域において「仲間が集い、意見をぶつけながら合意し、よい仕事を目指し、人から感謝されて、生きがいを持って働く」、協同で働く場が求められている。

そのような方々に、私たち全国の仲間が40年取り組んできた、協同労働の想い・実践・到達点を存分に伝えたい。そして労働者協同組合法が成立することで、多くの人に、自由に創造的で、違いを尊重し、お互いの想いを実現し、共に喜び共に悲しむ仲間ができる、そんな協同の働き方を多くの人に届けたい。

新年を迎えるにあたり、もう一度自分たちの原点に立ち返り、「協同で働くとはなにか」「よい仕事とはなにか」のこれまでの実践を振り返り、協同労働の到達点と課題を明確にし、地域に発信することから始めよう。若者が、子どもたちが、働くこと・未来に、希望が持てる協同の社会とそれを実現する協同労働の広がりを目指して。